



限界状況

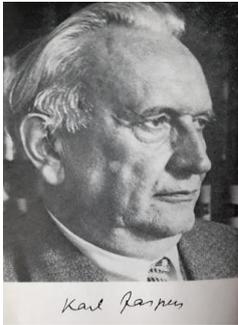
永田円了

At the Edge We Become

人は、逃げ場のない場所に立たされたとき、はじめて自分になる。評価も、肩書きも、予定通りに進む未来も、所詮、私たちを包み込む殻でしかない。ドイツの哲学者 カール・ヤスパースは、死や苦悩、罪責、闘争といった避けることのできない局面を「限界状況」と呼んだ。そしてその場はまた、人が本当に目を覚ます瞬間でもある。それまで信じていたものが崩れ、言葉が役にたたなくなり、励ましも理屈も届かない。ただ事実だけが、静かに、しかし圧倒的にそこにある。そのとき人は問われる。「それでも私はそれを引き受けるのか」

この問いに直面する瞬間、私たちは何かを失う。万能感、他者からの承認、未来への幻想。しかし同時に、何かが生まれる。自分で選び、自分で引き受けるとういう覚悟だ。崖の淵に立つとき、人は余計なものを手放す。見栄も体裁も、他人の期待も、そこで削ぎ落とされる。残るのは、「それでも立ち続けたい」という、むき出しの意志だけ。そのとき初めて、人は役割ではなく存在として立ち上がる。限界は私たちを壊すためにあるのではなく、限界は、殻を破るためにあるのである。

映画『奇跡の人』で描かれたアン・サリバン女史はまさにこの極限に立った一人である。言葉をもたず、世界から閉ざされたヘレン・ケラーと真正面からぶつかる食卓での激しい格闘は、しつけない。あれは「あなたは世界とつながれる存在だ」と、全身で訴える闘いである。ヤスパースはそれを「愛の闘争」と呼んでいる。



歴史にも同じ光景がある。幕末、土佐藩主に大政奉還を迫った坂本龍馬。相手は絶対的権威。失敗すれば命はない。それでも退かなかったのは、勝算があったからではない。国の未来が、今ここでの対話にかかっていると感じたからだろう。ここにもまた、破壊ではなく生成を目指す闘いがある。

さらに思い起こされるのは、コルベ神父の尊行である。第二次世界大戦中のアウシュビッツ強制収容所で、家族持ちの囚人の身代わりとなり、死を引き受けた。そこには戦略も勝利もない。ただ、他者の命を自らの内に担う決断があった。限界状況のただ中で、彼は他者の恐怖を引き受けることで、自らの存在を選び取ったのである。

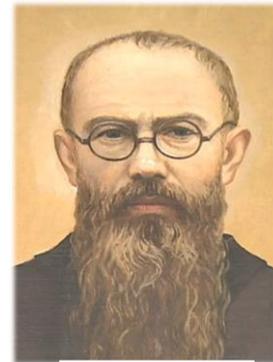
これら三つの場面に共通するのは、退路のなさである。逃げられない、代われない。そのとき人は問われる。自分は何を守るのか。誰として立つのか。限界状況は人を追い詰める。と同時に、仮面をはぎ取る。そこに現れてくるのは、恐れながらも相手の可能性を信じようとする意志である。限界状況での愛の闘争は、勝利の物語ではない。相手の自由のために、自らも傷つく覚悟を引き受ける行為である。

限界状況、それは光が消える場所ではない。むしろ、外の光がすべて失われるとき、人の内に灯るかすかな炎が見える場所である。その炎は小さい。しかしそれは、世界を変えるには十分な明るさをもっている。私たちもまた、いつかその淵に立つ。その時、何を選ぶのだろうか。夜が深いほど、星は近い。

<事例>

100分 de 名著「ヤスパース “哲学入門”」
 コルベ神父／限界状況の中で、自らの存在を選びとった
 シェクスピア／An open enemy is better than a false friend
 ヘレン・ケラー／サリバン先生の「愛の闘争」
 大河ドラマ・信長 vs. 木下藤吉郎／自分のこれからの生き方
 大河ドラマ・「べらぼう」／するどい「愛の闘争」
 坂本龍馬、土佐藩主・容堂に直訴、大政奉還を迫る
 辺見庸「地下鉄サリン事件」／皆シンプルに忙しい
 歌・アメイジンググレイス Amazing Grace

円了のホームページ: www.enryo.jp



コルベ神父